

昭和 42 年 12 月

原 著

軽 井 沢 の 歴 史

株式会社星野温泉 星 野 嘉 助

(昭和 42 年 8 月 20 日受理)

History of Karuizawa

Kasuke HOSHINO

(Hoshino Spa Co. Ltd.)

「Mr. K. Hoshino, Karuizawa, Japan」という宛名の手紙が、アメリカから届いたことがある。

それほど、この軽井沢は著名であるらしい。

しかし、「軽井沢」という地名は、実は全国いたるところにある。語源については、アイヌ語説、古代出雲語説など諸説あって詳かではないが、いずれも、清冽な清水の湧く山里に、この地名がある。

この軽井沢も、清水湧く山里であることに変わりはないが、近年、土木工事に伴って茂沢区南石堂から縄文中・後期の土器が発掘された。したがってこの寒冷の地にも 3, 4 千年以前からわれわれの祖先が生活したことが証明された。

入山峠からは、小型の剣、勾玉、管玉なども出土し、2 千年も前に人の往来のあったことが明らかとなった。

筆者は、自然保護、ことに野鳥の保護を己れの天職と観じている者で、歴史家ではないが、ここに乞われて、軽井沢の小史を述べることにする。

1. 有史以前の軽井沢

星野温泉は、浅間山の東南約 8 軒の位置にあるが、その地下 120 余米から、木材の堆積物が出てきた。

これを理化学研究所で、放射性炭素法によって年代測定をしたところ、35,200 年 (±2,200 年) 前のものであることがわかった。

東南さらに 5 軒の矢ヶ崎では、地下 20 米から同じ堆積物が出た。

浅間山の第二外輪山前掛山は、約 11,000 年前に生成されたものと計算されている。

後日第一外輪山、黒斑山の生成年代が測定されれば、軽井沢一帯が浅間山の造山期に埋もれたものかどうか、わかる勘定になる。

中谷宇吉郎博士は、「雪は天からの手紙である」と言われた。星野温泉の地下 120 米から発掘された木材の堆積物は、貴重な「地からの手紙」といえよう。

星野温泉の庭には、天然記念物の「花ヒョウタン木」がある。これは氷河時代に、日本が大陸と地続きであったことを証明する植物である。筆者はこれをたいせつに保存しているが、もしその由来を表示すると、見物人にたちまち枝が折り去られてしまう。

2. 古代から近世へ

2.1

「吾妻はや」

「ああ、吾妻はや」

日本武尊がそう三嘆されたのは、碓氷峠の頂上であるという。

日本書記の景行天皇の巻によれば、日本武尊御東征のみぎり、相模灘で海が大いに荒れ、今にも舟が沈みそうになった。姁の弟橘媛の人身御供によって尊は助かり、無事東征の任を果された。帰路碓日坂で濃い霧に閉ざされていると、八咫鳥が現われ、頂上へと導かれた。折から霧は急に晴れ、東方遙かに遠く相模灘を望むことができた。

尊は、今は亡き妻をしみじみと偲んで、三嘆されたのだという。この出来ごとは約 1860 年前のこととなっている。

この故事にちなみ、後年、熊野皇大神社が、峠の頂上に建てられて、現在に至っている。

碓氷峠が、古来、関東と北陸を結ぶ要路であったことも、それが難所であったことをも、よく伝えている話であろう。

碓氷峠は万葉の歌にも詠まれている。その歌碑が碓氷の見晴台に建っている。

2.2

平安時代の軽井沢は長倉とよばれ、馬の産地であるとともに交通の要衝であった。

建久 4 年 (1193 年、約 780 年前)、源頼朝は浅間山麓で大巻狩をおこない、熊野神社に上矢を奉納したという。

その折、馬の沓を掛けて道しるべとした土地が沓掛 (今の中軽井沢) であるという。

2.3

江戸幕府は、東海、中仙、甲州、日光、奥州の 5 街道を定め、諸所に関所を置き、一里塚を設け、交通の便を計るとともに通行人の取締りをおこなった。

中仙道は、慶長 7 年から 2 年がかりで、本格的に整備された。

当時の最重要街道であった東海道は、台風シーズンには「川止め」が多く、そのため中仙道がそれに代って重要性を担った。

軽井沢 (今の旧軽井沢)、沓掛 (今の中軽井沢)、追分 (今も追分) の三宿は、「浅間根腰の三宿」とよばれ、殷賑を極めた。

東海道に次いで参勤交代の大名行列の多いのも中仙道であった。「お道具は尾張様、行列は加賀様」というような言葉も伝わっている。

百万石の行列は軽井沢から追分まで続いたという。

3. 軽井沢近代史

3.1

殷賑を誇った浅間根腰の三宿も時の流れには勝てなかった。

明治26年(1893年)に鉄道が開通し(上野直江津間)。その結果この辺を歩く人はたちまち1人もいなくなってしまう。

なにしろ、横川から三宿までの碓氷峠越えは、歩くとたっぷり1日の行程で、それ故に三宿は賑わったのである。

歩く旅人がいなくなれば、宿場の命数はそれまでである。

碓氷峠の鉄道線路は、最高1000分の66.7の急勾配であった。そこで、ドイツのハルツ山で使われていた方式が採用された。この方式は通常のレールの中央に、歯状にしたレールを3本も敷き、これを機関車の下に装置した歯車と歯み合わせることによって汽車が滑り落ちることを防ぐものであった。

これが有名なアプト式である。

横川軽井沢間には、トンネルが26もあり、当時としてはたいへんな工事であった。

「ひなくもり碓日の坂を越えしだに 夫なのが袖もさやにふらしつ」(万葉集)とか、「旅人の身を粉にくたく峠道 石の臼井の峠なりとて」とか歌われたさしもの峠の千数百年の永い歴史も、鉄道の開通によって、たちまち過去の物語りとなってしまった。

主要交通機関の変革が地域の盛衰を運命づける様相は、新幹線の今も、アプト式の昔も、変りないようである。

3.2

話は明治初年にもどるが、維新後、信教の自由が許されると、欧米から続々と宣教師が入ってきた。

明治19年(1886年)の夏、英人宣教師 A. C. ショウ氏なる人が、布教の途次たまたま軽井沢を通った。

ショウ氏はスコットランドに生れ、父に従ってカナダに移住し、トロントの神学校を出た。明治6年(1873年)来日、福沢諭吉邸に寄食し、慶応義塾でキリスト教倫理学を講じたこともある。

軽井沢の風光はショウ氏の耳目を驚ろかせた。軽井沢の樅の林は北欧やカナダのそれによく似ていた。また乱れ咲く高原の花はスコットランドの花とそっくりだった。

アカハラの囀りは彼の故郷のラピンと間違える程だった。

そして、清い空気、太陽の輝やき、住み人たちの親切さ。

ショウ氏は望郷の念にかられ、土地に魅せられ、ついに明治21年(1888年)、軽井沢のだい塚山に簡素な家を建て、一夏を過ごした。

これが軽井沢の別荘の第1号である。

3.3

日本の夏のむし暑さにたえかねていた宣教師たちは、次々と軽井沢に別荘を建てはじめた。東洋の各地の宣教師たちも、やがて夏の3ヶ月を軽井沢で送るようになった。

進学問題の相談や結婚相手の選択などもおこなわれるようになり、夏の軽井沢の生活は彼らにとって不可欠のものとなった。

『予は軽井沢に滞在した。海拔 3,400 呎、空気の清鮮な仙境である。避暑に適し療病によく、夏の一両月はコスモポリスとなる。日本人はもとより、支那人、印度人、また、ドイツ人、英人、米人、仏人、クエーカー、新教徒、プレスビテリアン……。それらが皆親しく交際している』(米人チェンバレンの旅行記から)

鉄道により亡びた宿場町は(少くとも旧軽井沢は)鉄道により甦った。

外交官、貿易商、学者なども集まってきて、国際色豊かな明治・大正の軽井沢を現出した。商店街はまるで租界のようだった。

日曜には、人々は宗教を超越してユニオンチャーチに集まった。

土地の商人や職人はキリスト教徒たちの生活の影響を強くうけた。彼等は日曜には商売も成り立たないし、働く仕事もなかった。

そうして、土地の人々は時間を守ったり、約束を守ったり、うそを言わない習慣を身につけ、簡素な生活やテニスの楽しさを知り、自然を愛することを覚えた。

3・4

やがて日本人も集まるようになった。

まず、海外生活の体験者たちが集ってきた。

尾崎行雄、大隈重信、西園寺公望、桂太郎、新渡辺稲造、内村鑑造などの諸氏である。

宮家、華族、大実業家などの別荘も増えはじめ、町の雰囲気は華美に流れはじめた。

3・5

昭和に入ると、宣教師たちは野尻湖へ移って行ってしまい、外人といえ、外交官や貿易商になってしまった。37ヶ国の大公使が集る有様だった。

第2次大戦中は軽井沢は非武装地帯とされ、在日外人の居住地に指定された。居住者にはドイツ人が多かった。

終戦の頃、軽井沢には近衛文麿、鳩山一郎をはじめ、我国屈指の高官、知識人が多数疎開していた。

終戦の計画も練られていたという。

秘話も多く、三笠のスイス公使邸で憲兵の目をかすめて平和への裏面工作が行なわれたともいう。

3・6

戦後の軽井沢は、はじめは避暑どころではなかったばかりでなく、東京へ別荘を移築する人もあり、終戦時 2,200 余戸を数えた別荘も昭和 26 年には 1,900 戸に減ってしまった。

しかし、朝鮮戦争を機に、我国の経済力が回復するにつれ、軽井沢も復興しはじめた。

昭和 30 年代にはレジャー産業なるものが現われはじめ、「スケートセンター」を中心に軽井沢も観光地の性格をもちはじめた。

岩戸景気、神武景気を経て、大会社や官庁の健保組合の大きな社員寮が競ってできはじめた。招待旅行などの旅行ブームの波も訪れた。

サラリーマンの生活もようやく向上し、軽井沢にも大衆的な小型の別荘が建ちはじめた。

都市の乗物革命の波は軽井沢にも押し寄せ、かつての「自転車の町」は「自動車の町」と変

りはじめ、交通問題が起りはじめ、情緒も少しずつ失われるようになった。

中野、千代田、練馬、台東などの区の児童・生徒寮をはじめ、私立学校の寮も急に増えた。別荘地は、南軽井沢、追分、御代田、北軽井沢との中間の黒豆河原にまで広がりはじめた。「レークニュータウン」のような、別荘団地まで出現した。

これらの現象は日本経済成長の余波であり、結構なことであるが、今の軽井沢は、かつての「軽井沢」のイメージとは著しく異なったものとなりつつある。

4. 軽井沢の現状

昭和41年春軽井沢警察署が作った別荘名簿には次のように記されている。

| | |
|---------|---------|
| 個人別荘 | 3,678 戸 |
| 学校・会社の寮 | 487 戸 |
| 合 計 | 4,165 戸 |

毎年の新築数は、300 戸であるという。

会社の寮はますますデラックス化し、ホテルより立派なものも現われてきた。

個人別荘は必ずしもデラックス化せず、現代日本の個人所得の様相を示している。また、人々は都市生活から逃れ出ようとするあがきのようなものも感じられ、現代日本の病弊に思いを致さざるを得ない。

天明3年(1783年)の浅間山の大噴火でできた溶岩流「鬼の押し出し」に、一企業が困いをめぐらせて入場料をとることを始めると、町でも似たものを作った。これも現代の病弊である。

ともあれ、かつてキリスト教宣教師の夏の憩いの場であった軽井沢はいまや夏だけの別荘地ではなく、四季を通じての週末の静養とレジャーの地に脱皮しつつある。

なにしろ、碓氷峠は複線化され、アプト式は廃止され(電磁ブレーキの発達で危険が予想されなくなった)、終戦直後汽車で東京から5時間かかったものが今では特急で2時間20分である。軽井沢から上野まで信越線が整備される数年後には普通電車が2時間で走るようになる。

軽井沢のよさが夏だけのものではなく、春秋はさらによく、冬さえも夏に劣らぬ魅力あることを思えば、この地が国民大衆に知られ、その憩いと甦生の地として発展してゆくことは結構なことだといわねばなるまい。